

コリントの信徒への手紙 I 11 章 23-34 節

「ふさわしくないままで」

主の晩餐とは、今の「聖餐式」のことです。パウロの時代は、聖餐式の様式が定まっていないときで、主の晩餐を、単なる食事会の一部のように考えていた人もいました。コリントの教会では、金持ちが豪勢な食事をして、貧しい人々はそのおこぼれに与る、というようなことが行われていました。しかし、神の教会においてはそのようであってはなりません。パウロはこの深刻な問題をここで論じているのです。パウロは、主イエスがどのようにして主の晩餐を制定されたのかを語り始めます。今コリントの教会で行われている主の晩餐が、いかに主イエスご自身が制定された主の晩餐から離れてしまったのかを示すためでした。23節「引き渡された」とは、イエスは神ご自身によって、私たちの罪のために引き渡されたのです。イエスの御生涯は、人に与え続ける生涯でしたが、その人生の極みとして進んで自分の命すら与えてくださったのです。自分を喜ばせるのではなく、人のために生きる人生、それが主イエスの人生でしたが、その極みとしての死なのです。聖餐において、パンと杯をいただくことは、このイエスの死を覚え、告げ知らせるものなのです。しかし、コリントの教会の主の晩餐では、人々は自分のことばかり考えて、他人のことはお構いなしという状況でした。また、主イエスの死に際して流された血は「新しい契約」を制定するためでした。クリスチャンとは、この新しい契約に与るものです。新しい契約のメンバーはみな神の家族です。自分の本当の家族がお腹を空かせているのに、その人たちのことは全くお構いなしに自分だけ食べるような人がいるでしょうか？

パウロはここで、主イエスご自身による主の晩餐の制定、とりわけ私たちのために受けられた苦難と死とをコリントの人たちに思い起こさせることで、この大切な真理をコリントの人々によく考えるようにと促しているのです。このように主の受難を思い起こさせた後、パウロはこう書きます。27節の「ふさわしくないまま」の人たちとは誰でしょうか？それは空腹の人がいるのに、自分は満腹になって酔っぱらっているような人たちのことです。パウロは聖餐式を受けるために、徹底的に懺悔や悔悛をしなさいと言っているわけではありません。苦しんでいたり、無視したり心の中で馬鹿にしたりするような状態で聖餐に与るのなら、そのような人は「主のからだに血に対して罪を犯している」のです。だからこそ、31-32節を伝えます。「自分をさばく」とは、「自分自身をしっかりと吟味する」、「自分の行いを深く顧みる」というような意味です。神に裁かれるまえに、自分のことをしっかりと振り返りなさい。そして、万一神に裁かれたとしても、それで絶望してはいけない、それは裁きというより訓練・試練なのだ、子として親から受ける懲らしめなのだ、とパウロは語ります。

これから受ける主の聖餐、主の晩餐とは、主の死を覚える機会であるということです。主は私たちのために死なれました。それは人のために生きる、他人に与えるというイエス様の生涯の極みでした。その死によって新しい契約、新しい神の家族が生まれ、私たちはその家族に招かれたのです。ですから、私たちは自分のことだけでなく、この新しい家族の仲間の事も自分自身のように考えるべきなのです。聖餐はユーカーリストと呼ばれますが、これは「感謝」という意味です。主の尊い死に感謝し、その意味を覚えつつ私たちも聖餐を重んじて参りたいと願うものです。